

序

小児救急医療の崩壊が言われるようになって久しいが、小児救急医療の実態とは何であろうか。小児に対する時間外診療が、保護者のニーズの増大に応えられなく破綻しているだけであるとする見方もある。一方で、小児の危急的疾患は内因性のものだけではなく、外傷や中毒、環境障害などの外因性のものも多いため、子どもの生命を危うくするすべての病態に対応が可能な専門性が小児救急医療に不足していると考える立場もある。

本書の第一の目的は、対象疾患を外傷、熱傷などの初期対応にも広げ、一般小児科医が敬遠していた領域も含めたことであり、第二の目的は救急医療のなかに医療者としての感性（アート）を取り上げたことである。医療はサイエンスとアートからなると言われているが、自然科学としての医学（サイエンス）に関しては多くの成書がある一方で、アートに関して触れたものは少ない。ウィリアム・オスラーの言葉に「医療者には患者の痛みがわかり、苦しみを受け止める感性が不可欠である」の一節がある。アートから始まった医療は、自然科学の進歩とともにサイエンスの占める比率が増加し、最近では患者の痛みに寄り添うアートの部分が忘れ去られている感がある。病を診るのではなく、病をもった人を診ることに徹し、患者の焦り・不安・悩み・憤り・攻撃性を受け止め、納得・安心に変えていかなければならない。特に子どもの病気は保護者にとって、わがこと以上に心配のものであるため特別の配慮が必要である。

小児救急医療とは、本来このような感性豊かで子どもをいとおしむ心をもった専門性の高いものでなくてはならない。また同時に、未来に羽ばたく子どもの健全な発育を守る使命感と修練された知的職業を楽しむ余裕も必要である。

本書はこのような趣旨で企画されたもので、小児の危急性疾患に対する全人的な対応の指針として活用していただくことを願っている。

順天堂大学医学部附属浦安病院救急診療科

山田至康

追悼の序

小児救急医療を求める保護者には、世情と相まって、専門医志向が強く、小児科専門医の診療を強く求める風潮が強く感じられてきた。その背景には、稀な疾患での不幸な転帰を辿った救急症例の報道において、小児科専門医不在の救急体制のみに言及したメディアの存在も無視できない。しかし、現実的には小児科医のみでの小児救急医療体制の拡充には限度があり、多くの関係診療科の支援を仰ぐ必要があるのも事実である。この数年、ER救命センターなどへの転換など、救急医療体制そのものの変化が成人救急医療においても起こっており、小児救急医療を担う、あるいは担わざるを得ない医療者が小児救急疾患への対応のスキルアップを行いつつあり、小児救急疾患へのアプローチを多くの医療者が行うようになってきている。この結果、保護者が安心できる小児救急医療提供体制への変化が起こり、保護者の意識の変化もみられるようになってきているといえよう。

しかし、物言わぬ乳幼児の多い、あるいは心配過多の多い保護者への対応が苦手の医療者も少なくなく、さらには圧倒的に多い軽症疾患に慢心して、紛れ込む重篤疾患を看過することも少なくない。このような背景の打破を目的に、小児救急医療に関わる医療者の、医療面接を含めた、更なるスキルアップを求めて、本書が編集企画されたと推察する。

編集企画した故山田至康先生は小児救急医療で知り合った20年来の親友であり、小児救急医療の充実に向けてともに活動した盟友である。私はかねてから、小児内科的危急疾患にしか対応してこなかった小児科医療の枠を超えて、いわゆる小児科救急ではなく、事故外傷中毒疾患なども含めた小児救急を小児科医が行わねばならない。あるいは、軽症で食い止める小児救急医療の実践が必要であり、軽症ばかりで真の救急医療ではないという医療者中心の考え方に警鐘を鳴らしていた。山田先生はそのような私の考えに賛同し、自ら成人救急医療に飛び込み、小児救急を行う小児科医が自ら成人救急医・集中治療医との連携・協働を行うべきだと声を大にして訴え、新たな小児救急のあり方を確立しようとしていた矢先の急逝となった。表裏一体・二人三脚で真の小児救急医療の実践を、と一緒に活動してきたがゆえに、計り知れないほどの失意が襲い、悔やんでも悔やみきれない彼の死であるが、二人共通の志を大成することを今後の目標に彼の分まで頑張らねばならない。

山田先生の志に賛同する小児救急医療最前線の多くの第一人者により分担執筆されている本書が、わが国における真の、さらには保護者の満足する小児救急医療提供の確立に際して、確固たる道標となるものと信じて疑わない。今後、輩出される優秀な若い救急医をはじめ、多くの小児救急医療を担う人々に活用され、わが国の多くの子ども達と保護者の支援になることを願ってやまない。それが天国でやっつくつろげるようになった故山田至康先生への一番の贈り物になるであろうし、彼が最も望んでいることであろう。（合掌）

平成23年4月

日本小児救急医学会理事長
北九州市立八幡病院小児救急センター
市川光太郎